

(3) 国際交流センター活動報告 (2004.4~2005.3)

2年目の国際交流センター

— 多面的活動への芽吹き —

国際交流センター長 佐藤 進

国際交流センターが体制を整えて活動し始めてから2年目、その活動は1年目に注力した外国人留学生への支援を含めて、著しく多面的となった。留学生の「受け入れ」に対して、日本人学生の海外への「送り出し」が実現し、海外に提携校も出来た。本学の精神である地域に根ざす原則は国際交流活動の中でも一貫し、松本市や、新村公民館などとも協力活動が進んだ。外国人留学生とのつながりでもきめ細かい配慮や多面的な活動を通じて強化された。この中で、センター室に常勤教職員がいないことが痛感されたが、この点も来年度から配置されることになった。

全体としてこの一年を総括するならば、国際交流センターを拠点として本学の国際活動が今後多面的に発展する多くの芽吹きが見られた年といえよう。

1. 外国人留学生との結びつき強化

学年が進行するにしたがって、総合経営学部の留学生数が着実に増加する中で、同学部を中心として留学生自身の積極的参加のもとに、様々な新しい取り組みが行われた。中でも学園祭において餃子を提供する取り組みでは、学園祭当日の成功もめざましかったが、その前に乗鞍ユースホテルにおいて準備のための餃子講習会を行ったが、留学生ばかりでなく、日本人学生の積極的参加もあり、心豊かな交流会となった。

新村公民館と本学を舞台として中国語および韓国語講座が留学生を講師として実施に移された。地域住民と留学生との接点が着実に広がって根付いた証拠に、新村公民館でのカラオケ大会に留学生が多く参加したことにも現れている。

これに対して、2月に行った乗鞍高原スキーツアーは、昨年度第1回の成功にもかかわらず参加者が少なく、留学生との結びつきの弱さを露呈した。来年度に同じ企画をした場合、参加者数は結びつきが1年かけて強まったか否かを判断する指標になるだろう。

2. 日本人学生の海外への送り出し

3. に述べる松本市・ソルトレークシティ提携委員会主催の国際生活スクールに本学から大学生として初めて2名の学生が参加した。

湘北短期大学のオーストラリア夏季研修に本学学生5名が初めて参加したし、また短大部英語研修コースのシンガポールホテル実習にも学生たちの積極的参加があった。総合経営学部の学生たちが中国語の研修コースに上海の大学に短期の留学をするなど、本学学生の海外留学への意欲が高まってきたといえる。

3. 海外大学との提携

ソルトレークシティ国際生活スクールへの参加にさかのぼって、松本市商工会議所（提携委員会事務局）は本学でのオリエンテーションに担当者を参加させ勧誘を行った。本学学生の参加はまさに地域とともに行った事業だったといえる。

後述の教職員を中心に行った英語による交流グループへ、ブリガム・ヤング大学の学生（ブエナビスタホテルにおいて研修）を招待する（7月）などの交流の中から、同大学を訪問する機会も生まれ、また同大学（プロボ市）の隣町オレム市にあるユタ・バレー州立大学との提携につながるきっかけともなった。

松本市の中国の友好都市である廊坊市公式訪問団にも参加（10月）した。

新村地域では公民館主催の形で留学生による中国語、韓国語の語学講座が実現し、市内全域からそれぞれ30名余りの方々の受講を頂き好評を得た。なお、中国語講座は講座終了後に自主サークルとして留学生を講師に継続して勉強会が行われている。また新村公民館主催のカラオケ大会にも多くの留学生たちが参加した。

留学生歓迎パーティには市広報国際交流課、廊坊市からの研修者職員、新村の住民が参加したほか、上記英語による交流も含めて原則として地域開放を心がけて行った。

4. 海外他大学との提携を実現

下記2校と提携が結ばれた（3月）。本学にとっては初めて海外提携大学が生まれたことになる。

○ユタ・バレー州立大学（米国ユタ州オレム市、松本大学との大学間協定）

○中国人民大学外国語学院（中国北京市、松本大学総合経営学部との学部間協定）

両協定ともに出来る協力関係から次第に手を広げるという弾力的な内容になっている一方で、協定成立と同時に協定にもとづく具体的行動が生まれていることが特徴だった。日本の各大学が多く協定を結んでも名ばかりに終わっているのと対照的に、本学の場合には実践的な協定としてスタートしたといえる。すなわち、ユタ・バレー州立大には4月から学部生1名が英語研修のために短期留学することになり、また中国人民大学紀要に本学教員の論文が協定にもとづき寄稿された。

両大学の関係ができたのは、いずれも所在地が松本市の姉妹都市、友好都市の近隣である（ソルトレークシティ近隣のオレム市、廊坊市の隣、北京市）ことに現れているとおり、地域同士のつながりが深いことが機縁になっている。大学間提携関係を地域のためにも活かしていくこととしたい。

5. その他

1. に述べた留学生との関係強化はとりもなおさず留学生の参加意欲の高まりを生んでいる。日本語科目開講とも相まって、秋の松本東ロータリークラブ留学生日本語スピーチコンテストには一段と高いレベルの代表2名を送ることができ、その一人、柏松華さんが審査員特別賞を獲得した。

昨年度後半に開始した教職員を中心とする英語による交流会 Brown Bag は本年度は着実に回を重ね、外国人教員、日本人学生の参加もあった。またこの会の参加者を母体として、本学を会場とする地域の英語スピーチクラブ、松本トーストマスターズクラブの設立が企画され4月以降の実施が公表されている（3月）。

また松本青年会議所グローバルコミュニケーション委員会、アイデンティティ育成室の呼びかけに応え、短大部学友会渉外局を含む本学学生と同会議所による地域の国際活動共同事業の検討が始まった（3月）。センターの仲介と支援のもとに着実に回を重ねている。